

ファンタジーの終わりの時

——『指輪物語』における西方の島——

渡 辺 美 樹

I

現代のファンタジーの完結篇は往々にして最後に西方浄土のイメージをもつある空間に言及する。例えば『指輪物語』(The Lord of the Rings)⁽¹⁾の「不死の島」(Undying Lands)と呼ばれる「至福の国」(Blessed Realm)や、『プリデイン物語』(The Chronicles of Prydain)⁽²⁾の「真夏の国」(Summer Country)や、『闇との戦い』(The Dark is Rising Sequence)⁽³⁾の「北風の後ろの国」(the Back of the North Wind)のことである。どの作品もその物語の中に登場していた所謂不老不死の人々が西方浄土のイメージをもつ島に船出するところで終わりとなっている。拙稿ではこの種のファンタジーの出発点である『指輪物語』を典型とみなして物語の終わりに出現するこの島の意義を明確にしていきたいと思う。

II

J. R. R. トールキン(J. R. R. Tolkien)の『指輪物語』は「中つ国」(Middle-earth)という架空の大陸を舞台とする長編ファンタジーである。この物語の主人公フロド・バギンズ(Frodo Baggins)が「中つ国」の北西部にある自分の故郷、ホビット庄(the Shire)から、魔王サウロン(Sauron)の王国、モルドール(Mordor)に出かけ、その王国の中枢である火山オロドルイン(Orodruin)

の噴火口、滅びの罅裂 (Cracks of Doom) に邪悪な「一の指輪」(One Ring) を投げ込んでサウロンとその王国をその指輪もろとも滅ぼす過程をサウロンが「中つ国」全体の支配を目論んで引き起こす指輪戦争 (the War of the Rings) を絡ませながら物語っていく。サウロンの滅亡後、「中つ国」では人間の支配する時代が始まり、主人公フロドや力を失った善なる「三の指輪」(Three Rings) の所有者らが「中つ国」から西方にある「至福の国」へ旅立つことで物語は終末を迎えている。

ところが、この物語がファンタジーという^{ナラティブ}物語の中でも新しいジャンルに属するためにその規範となるべき様式が存在していない。^{コンヴェンション}それで、トルキン自身が『指輪物語』を『ホビットの冒険』(The Hobbit)⁽⁴⁾の主人公、ビルボ・バギンズ (Bilbo Baggins) が偶然手に入れた姿の消すことのできる指輪の返還をモチーフにして書き進めたいと述べている⁽⁵⁾ために、この物語を探究物語の一種として把握してしまい、その逸脱部分に当たる西方への旅立ちを無視する傾向がある⁽⁶⁾。実際に物語の第三章で、ビルボから譲渡された姿の消すことのできる指輪が邪悪な「一の指輪」であることを知らされたフロドが、「私は何を求めることになるのでしょうか。ビルドは宝探しに行って戻って来ました。でも私は宝物をなくしに行くのです。しかも、予想のつく限りでは戻ってこれないのです。」⁽⁷⁾と述べているために『指輪物語』は探究物語の一種として解釈されがちである。

探究物語とは『アルゴナウティカ』(Argonautika)⁽⁸⁾のように「旅立ち、成就、帰還」(voyage out, achievement, return)⁽⁹⁾から成り立っている。『指輪物語』では前述したように確かにフロドの「旅立ち、使命達成、帰国」の順に物語が進行する。しかしながら、物語は墮落した魔法使いサルーマン (Saruman) が引き起こしたホビット庄の危難をフロドらが救った時点、つまりフロドの帰国で終わらずに、フロドの「至福の国」への旅立ちで終わる。「至福の国」への旅立ちとは伝統的な探究物語の様式からの逸脱を、つまりそのジャンルの変革を示しているということをとらえても、もっと重要視されねばならない要素である。⁽¹⁰⁾

そのうえ、探究物語のプロットの様式からの逸脱を示す「至福の国」への旅立ちが物語の終わりに位置することで物語内での重要性をさらに増している。フランク・カーモードは直線的時間のある一点に終末を設定することで世界を意味づけようとしてきた終末論と初め、中、終わりから成るプロットを仮構する文学の虚構とは同じ人間的営為であるから、文学の虚構においても終わりが作品全体に持続と意味を付与するものであると述べている⁽¹¹⁾。つまり虚構の中の時間は初めも終わりもないクロノスではなくて、いつか来るはずの終わりによって意味づけされる初めと終わりの中間時、カイロスになるという意味で物語の終わりの重要性を指摘しているのである。故に、伝統的な様式からの逸脱部分である「至福の国」を無視してこの物語を単に探究物語の一種として解釈するのは物語の終わりの重要性をも無視することになるのである。

さらに、作者トルキン自身、妖精物語つまりファンタジーの終わり方に拘泥している。『指輪物語』の執筆中に行った「妖精物語について」(“On Fairy-Stories”)⁽¹²⁾という1938年の講演の中で、「回復、逃避、慰め」を与える完璧な妖精物語はすべて「幸せな結末の慰め」をもつべきであるとトルキンは主張している。このトルキンの意識を反映して『指輪物語』の中では記録者として実際にこの物語を書いているビルボ・バギンズが絶えず幸せな結末、「そして一生を終えるまでずっと幸福に暮らしていました。」⁽¹³⁾という結びの言葉の必要性を述べている。このように終わりに対する意識が作家の態度にも作品内にも存在しているのであるから、探求物語のもつプロットの結末部分に当たる「ホビット庄の掃蕩」(“The Scouring of the Shire”)という帰還を示す章のあとになおかつ「灰色港」(“The Grey Havens”)という西方への旅を示す最終章が探究物語という伝統的な様式から逸脱してまで付加されていることを重要視しなければならない。

III

探究物語のもつプロットの様式からの逸脱を示していると同時に、作品全体

に持続と意味を与える物語の終わりに存在する「至福の国」が『指輪物語』の中で実際にどのような意味をもっているのか、これから検討していきたい。

「至福の国」は殺されない限り、永遠に生きることのできるエルフ族 (the Elves) の故郷であり、不老不死のエルフのみが渡って行くことのできる島である。そのため「不死の国」(Undying Lands)とも呼ばれる「至福の国」の名称自体が、西方への長い航海を経てたどりつくことと相まって、「幸せの島」^{オグインズアケル}、「不老不死国」^{オグインズアケル}、「西方の島」といった異界を連想させる。

「至福の国」が西方浄土のイメージをもつ島であることは『指輪物語』に付録としてつけられた地図によって明確にされている。「中つ国」はその形態からヨーロッパ大陸を模して準創造されている。勿論、その地理の中に「至福の国」は描かれていないが、ヨーロッパ大陸の模倣である「中つ国」とは海を隔てて西にあることになっている。「至福の国」はブリテン島を模していると言い得る。大陸の西に存在し、緯度のわりに温暖な気候のブリテン島はケルト民族の伝承の中では死者の住処である「ブリッティア」と呼ばれる異界であった。また、ギリシャ、ローマ文明の流れの中にあっても、ブリテン島は古代からルネサンスにかけて、祝福された死者たちの集う「西方の島」^{オグインズアケル}、「幸せの島」の候補地であった⁽¹⁹⁾。「至福の国」は地理的に模倣の対象であるブリテン島を介しても文字通り、「西方の島」を代表とする異界の変種なのである。

『指輪物語』の中では地理的上の東西の対立が善悪の対立となって表現されている。つまり「中つ国」の東部に魔王サウロンの支配する王国モルドールがあり、大河アンドュイン (Anduin) を隔ててその西隣りに Gondor の都、ミナス・ティリス (Minas Tirith) がある。実際に東西の対立が衝突する戦場として描写されるのは東から攻め寄せて来るサウロンの軍隊に囲まれたミナス・ティリスであるが、理念上、この東のサウロンと対立するのは、モルドールの西にある王国、Gondor ではなくて、そのはるか西にある「至福の国」である。というのは、実際に中つ国の西側に住んでいても、Gondor の執政、デネソール (Denethor) や白の魔法使いサルーマンのように、サウロンの悪に屈服してしまう者もある。「中つ国」に住む者のうちで、そのサウロ

ンの邪悪な力に屈し得ないのは「至福の国」に住んだことのあるエルフだけだからである。それ故、モルドールと「至福の国」という正反対の二つの力が出合う地点が「中つ国」の西部、死すべき人間の住む国であり、その衝突が「中つ国」における指輪戦争と考えるべきである。

東西の対立が善悪の対立となっていると前述してきたが、東が悪を意味することは「中つ国」の東部にあるモルドールの主人、サウロンの描写から明らかである。サウロンは「中つ国」全体の制覇とすべての生物の奴隷化を望む、所謂専制君主である。その目的達成に必要な邪悪な一の指輪を捜し求めるサウロンは悪に憑依されてたった一つの行動パターンしかとることができないので、「赤い目」をした真黒な化物という「分裂病的歪曲」⁽⁴⁵⁾のおきた悪霊の姿をしているのである。また東の代名詞であるモルドールの景観もその住人も、主人同様に人間にとって好ましくないものとして描写されている。つまりモルドールは暗闇の砂漠として、その住人はけんか好きのオーク族(the Orcs)として叙述される。というのも、すべての人間にとって好ましくない悪を東であるモルドールが意味するからである。

地理的に対立した位置関係にある「至福の国」とモルドールは善と悪の対立関係を示すために光と闇の対立を用いてその空間の叙述も正反対なものとなっていると言ってもよい。「至福の国」は『指輪物語』の中で実際に描写されているわけではないが、「中つ国」のエルフの住処であるロスロリエン(Lothlórien)の描写を介してその対立関係は明らかである。

まず、「至福の国」と正反対なものであるモルドールは「暗黒の国」(Black Land, the Land of Shadow)とも呼ばれている。この地にサウロンの支配に抵抗する「中つ国」の西方世界の者としてフロドとその召使いのサム(Sam)が初めて足を踏み入れるのであるが、景観の変化によってモルドールが死の国であることが語られていく。つまりエミン・ムイル(Emyrn Muil)という通行できそうもない断崖絶壁しか存在していない荒涼とした山脈や人魂が飛びかい、戦死者の顔が水底に見える死者の沼地(Dead Marshes)といった生物の生息を許さないような土地を経てモルドールに至るのであるが、その眼前に広がる土

地は植物の再生すら許さぬ死の土地なのである。

Frodo looked round in horror Even to the Mere of Dead Faces some haggard phantom of green spring would come; but here neither spring nor summer would ever come again. Here nothing lived, not even the leprous growths that feed on rottenness. The gasping pools were choked with ash and crawling muds, sickly white and grey, High mounds of crushed and powdered rock, great cones of earth fire-blasted and poison-stained, stood like an obscene graveyard in endless rows, slowly revealed in the reluctant light.⁽¹⁶⁾

The sun was up, walking among clouds and long flags of smoke, but even the sunlight was defiled. The hobbits had no welcome for that light: unfriendly it seemed, revealing them in their helplessness....⁽¹⁷⁾

さらに、このように土地を荒廃させる原因はモルドールの中枢である火山オールドインの巻き上げる噴煙や火山灰なのである。火山灰によって生命の源の水は汚染されてその力を失い、また噴煙による光の遮断のせいでその地は永遠の冬となっている。だからハンセン病の菌ですら生物であるために繁殖できないほどの生命の墓場として描写されている。

モルドール国内はこの景観に光の不在がプラスされた暗闇の地となっている。フロドの最終目的地である滅びの罅が噴煙を巻き上げて絶えず暗闇を作り出しているからである。昼でも夜の帷に包まれたモルドールは生命の必要とする光や水の存在しない死地、謂わば地下の死の国となっている。

この暗闇の地でフロドが頼りとしているのは光、つまり「至福の国」のもつ力であると言ってよい。「中つ国」のエルフの住処であるロスロリエンの女主人、ガラドリエル (Galadriel) が星の光を集めて作った破璃瓶 (Phial of Galadriel) はフロドの行く末を照らし出す唯一の光であるし、また「至福の国」の女主人、エルベレス (Elbereth) の名前を呼ぶことで、フロドとサムはその助けを借り

ることができるからである。例えばモルドールの番人、沈黙の「座像」(Silent Watchers)は破璃瓶の放つ光を恐れてサムの通行を許したし、またエルベレスの名を唱えることでその像は崩壊してしまった。このように暗闇の力をもつモルドールに対抗できるのは光の力であり、「至福の国」の力なのである。

前述したように、冥界モルドールにあってその力に対抗できるのは「至福の国」の力であるから、モルドールとは全く対照的な景観が「至福の国」に与えられていると思われるが、繰り返し述べているように「至福の国」への言及はあっても、その描写は存在していない。だが、その手がかりは「中つ国」の楽園として描かれているロスロリエンにある。つまり「至福の国」はエルフの住む洋上楽園であるから、「中つ国」のエルフの住むもう一つの楽園、ロスロリエンと同質のものと考えてよい。実際にフロドの体験の相違によって対照的な空間として叙述されるのは暗闇のモルドールと光に満ちたロスロリエンだからである。

女主人のガラドリエルがエルフのもつ善なる三の指輪の一つを用いてロリエンの地を楽園としている。楽園の必須条件であるその土地の閉鎖性は地理からも明らかである。何らかの形で水という障害物のある他の楽園と同様に、二つの川にはさまれた三角州にロリエンは存在し、そこは外界をつなぐ橋が川にかけられていない閉鎖された空間になっている。この地にはガラドリエルの許可がないと入ることができないという点でも二重に閉ざされた「囲われた地」である。

地下の死の国を暗示するモルドールとは全く逆にロリエンは「マロン樹」(mallorn-tree)の木の葉が黄金色に輝く「黄金の森」であり、光に満ちあふれて暗闇のはいりこむ隙のない地である。フロドは以下のように初めて目にしたロリエンのことを感じている。

It seemed to him (= Frodo) that he had stepped through a high window that looked on a vanished world. A light was upon it for which his language had no name In winter here no heart could mourn for summer or

for spring. No blemish or sickness or deformity could be seen in anything that grew upon the earth. On the land of Lóren there was no stain. ⁽¹⁸⁾

三月の初頭のモルドールが謂わば永遠の冬、つまり再生の訪れることのない冬であったのと同様に、この箇所では今現在冬であるにもかかわらず、ロリエンが永遠の春の状態にあることを示している。ロリエンは楽園のもつ常春の条件を満たす土地でもある。

また火山の巻き上げる噴煙のためにモルドールが暗闇の地であったのに対して、ロリエンが黒という色の存在しないほど光にあふれた土地であることは闇のモルドールが悪の表象であるのに対して、光のロリエンが善の表象であることを示す。このことはすべてを白日のもとにさらけ出す光に満ちたロリエンという土地が人間の心の内に潜む邪悪なものを黒いしみとして浮かびあがらせてしまうことによって裏打ちされている。ロリエンの光は悪と対立する善を象徴するものであり、モルドールとロリエンの対立は善悪の対立、光と闇の対立となって表わされている。つまりロリエンは表層に浮かびあがってこない「至福の国」の代弁者とも言える。

ロリエンが「至福の国」と同様に一つの楽園であることはロリエンの時間の流れが外界のそれと比べてゆっくりであることによっても表現されている。さらに楽園の一つの条件である有閑オティウムはフロドがエルフラと詩作を試みることで保証されているといってもよい。これはフロドにとって邪悪な指輪の力や水と食糧の不足によって悩まされるモルドールが餓鬼地獄であるのと同様に、対照的である。

だが、死の国、モルドールも、楽園の地、ロスロリエンも一つの共通部分をもつ。双方ともに「中つ国」の異界であり、物語の終わり、つまり人間の時代の到来とともに滅んでしまう地となる点である。フロドの使命達成を意味する一の指輪の破壊によって三の指輪の力も失われてしまうので、その指輪の力で楽園であったロリエンも廃園となってしまうのである。フロドの使命達成は邪悪な一の指輪も善なる三の指輪も、また二つの異界、ロリエンもモルドールも、

つまり超自然の力をもつ善悪をともに滅ぼして人間の時代の到来を告げている。物語の終わりの時点の「中つ国」は人間の時代にふさわしく、非日常的な空間である異界の存在を許容しないのである。

ロリエン同様にエルフの住まう一つの楽園である「至福の国」は「中つ国」での住処を失ったエルフにとっては最後に残された唯一の楽園となる。祖型的に洋上楽園であるこの島は不老不死の者しか近づくことのできない閉じた空間をもつ。エルフ族の一人、ハルディア (Haldir) は「至福の国」について以下のように述べている。

“For the Elves, I fear, it will prove at best a truce, in which they may pass to the Sea unhindered and leave the Middle-earth for ever. Alas for Lothlórien that I love! It would be a poor life in a land where no mallorn grew. But if there are mallorn-trees beyond the Great Sea, none have reported it.”⁽¹⁹⁾

つまり「至福の国」は「中つ国」から行くことはできても戻ることはできない完全に閉ざされた空間なのである。

またハルディアのマロン樹に対する思い、つまりロリエンの地によせる愛情を考えた場合、この閉ざされた「至福の国」は果たして真の楽園といえるのだろうか。もともと西方へは「中つ国」の生活に疲れたエルフ、例えばオーク鬼に傷つけられたケレブリアン (Celebrían) のように傷心のエルフが慰めを求めて行く所なのである。エルフたちは、魔王サウロンの打倒のためにロリエンという住処を失って西方に旅立つのもやむを得ないと考えているのであって、喜んで西方に旅立って行くわけではない。エルフたちはむしろハルディアのように「至福の国」から「中つ国」に思いを施せることになるのではないかと思われる。エルフたちにとって「至福の国」は「中つ国」に立ち戻ることを許さない閉じ込めの空間だからである。

「中つ国」の第三紀は指輪保持者らの西方への船出で終わり、それと同時に

人間の支配する第四紀が『指輪物語』という一冊の本を読み終えた時点、つまり西方の島への船出を読み終えた時点で始まる。

魔法使いガンダルフがこの二つの世紀の違いを次のように述べている。

“Third Age of the world is ended, and the new age is begun For the time comes of the Dominion of Men, and the Elder kindred shall fade or depart..... The Third Age was my age. I was the Enemy of Sauron and my work is finished. I shall go (to the Undying Lands) soon. The burden must lie now upon you and your kindred (=human beings).”⁽²⁰⁾

『指輪物語』という一冊の本が物語る第三紀が魔法使いやエルフが魔王サウロンに敵対する時代であったのに対して、語られていない第四紀は魔法使いもエルフも魔王も存在しない人間の時代である。そして、人間以外の種族は伝説上の生き物となる時代なのである。人間の眼で見る限り、「中つ国」は人間しか存在しなくなり、我々人間の暮らしている現実法則に従う日常空間の地となるのである。つまり西方の島の出現を境界としてエルフや魔法使いといった超自然の生物が活躍する世紀とそのような生物の存在しない人間の世紀とに分裂させるのである。歴史上は全くあり得ない話である物語内の時間の終わり、つまり第三紀の終わりが読書体験の終わりの時間であるために、物語の終わりのあとに続くはずの第四紀という人間の時代と物語内の時間とが連続していないのである。

ファンタジーという架空の物語の終わりの時が超自然の生物である不老不死のエルフらを「至福の国」という人間に関与できない空間に閉じこめるために、『指輪物語』で語られる時とその後存在する歴史の時とが不連続であることを示している。ファンタジーの終わりの瞬間はエルフを西方の島に閉じこめることによって、超自然の者のいない時代が人間の時代であることを暗示する。そのため、今まで物語られてきた物語内の時間がその後語られるかも知れない人間の時代の時間、あるいは読書体験後の現実の時間と結びつかないのである。

さらに、『指輪物語』の終わりのあとに来るはずの人間の時代は昔話や伝説に登場するエルフが歴史には存在しないために実在する人類の歴史と容易に結びつくのである。やはりそれまで物語られてきた『指輪物語』の世界とそれ以後に始まる人間の時代との間には、不死の者を西方の島、つまり現実の歴史においても存在しない異界に閉じこめることによって、人間の理解を越えた超自然のものの存在する過去がそういうものの存在しない現在という時代から完全に切断されていることを示している。

『指輪物語』の登場人物のその後、及びその孫子に至るまでの記録を年表として物語の最後に付加したことはこの物語の語り手が物語の含み得る時間をすべてパースペクティブにおさめたうえで、物語っていることを示している。三人称語りにおける過去の時制は謂わば基準をもたない虚妄の過去であり、前述したように物語内の時間とその後の時間とが切断されているので、現在と何ら接点をもたない過去を『指輪物語』は語っているといってもよい。

西方の島は絶対的な境界となってその後やって来るはずの時代とその物語の時代とを区分している。そのうえ、物語内の時間は現実の時間とは結びつかない。故に『指輪物語』は「未完結的な現在時との接触の可能性の一切ない、はるか昔の形象の領域に構築」⁽²¹⁾された叙事的文学であり、「至福の国」は『指輪物語』が叙事的文学の流れを汲む作品であることを示す指標なのである。西方の島が最後に出現してその物語内の時間が現在と何ら接点をもたぬ絶対的な過去の時であることを示すからである。またその西方の島の出現によって『指輪物語』が語る世界が現代からは到達できない絶対的過去を物語っていることがわかるのである。

IV

ミハイル・バフチン (Mikhail Bakhtin) は「叙事詩と小説」(“Epic and Novel”)⁽²²⁾の中で叙事詩の特徴として、その主題が国家の叙事詩的過去、つまり絶対的過去であることや、叙事詩の源泉は国民的伝説であることや、最後に

叙事詩の世界が絶対的な叙事詩的距離によって作者及びその聴衆の時代から分離されていなければならないことを挙げている。『指輪物語』ではトールキンの作り出した神話や伝説が「中つ国」の世界の源泉である。またその主題は人間の世紀がいかに始まったかを述べているといってもよい。この拙稿では「至福の国」という西方浄土のイメージをもつ島が「中つ国」の世界と現代の世界との間に絶対的な叙事詩的距離を生み出していることを示した。ファンタジーと叙事詩との関係については今後の課題であるが、「西方の島」の存在はファンタジーが叙事詩の流れを汲むものであるという一つの証左たり得ると思う。

— 注 —

- (1) テクストはJ. R. R. Tolken, *The Lord of the Rings: vol. 1, The Fellowship of the Rings, vol. 2, The Two Towers, vol. 3, Return of the King*, (London: Unwine, 1954) によった。
- (2) Lloyd Alexander, *The Chronicles of Prydain: The Book of Three*, (New York: Holt, Rinehart & Winston, 1964), *The Black Cauldron*, (New York: Holt, Rinehart & Winston, 1965), *The Castle of Llyr*, (New York: Holt, Rinehart & Winston, 1966), *Taran Wanderer*, (New York: Holt, Rinehart & Winston, 1967), *The High King*, (New York: Holt, Rinehart & Winston, 1968).
- (3) Susan Cooper, *The Dark is Rising Sequence: Over Sea, Under Stone*, (Harmonsworth: Penguin, 1968), *The Dark is Rising*, (Harmonsworth: Penguin, 1976), *Greenwitch*, (Harmonsworth: Penguin, 1977), *The Grey King*, (Harmonsworth: Penguin, 1977), *Silver on The Tree*, (Harmonsworth: Penguin, 1979)
- (4) J. R. R. Tolkien, *The Hobbit*, (London: Unwine, 1937).
- (5) Humphrey Carpenter, *J. R. R. Tolken: A biography*, (London: Geoge Allen & Unwine, 1977), p. 186.

- (6) 探究物語についてはW. H. Audenの“The Quest Hero”を嚆矢としてさまざま論文がある。cf. W. H. Auden, “The Quest Hero”, ed. by Neil D. Isaacs and Rose A. Zimbaro, *Tolkien and his Critics*, (Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1968), pp. 40—61.
- (7) Tolkien, *The Lord of the Rings*, vol. 1, p. 71.
- (8) アポロニオス, 岡道男訳, 「アルゴナウティカ」, 木村彰一他編, 『世界文学全集』第一巻, (東京:講談社, 1982), 所収。
- (9) Robert Scholes and Robert Kellogg, *The Nature of Narrative*, (Oxford: Oxford U. P., 1966), p. 228.
- (10) cf. Jonathan Culler, *Structuralist Poetics: Structuralism Linguistics and the Study of Literature*, (London: Routledge and Kegan Paul, 1975), pp. 113—130.
- (11) Frank Kermode, *The Sense of an Ending*, (Oxford: Oxford Univ. Press., 1966), pp. 45—46.
- (12) J. R. R. Tolkien, “On Fairy-Stories”, *Poem and Stories* (London: Allen & Unwin, 1980), pp. 175—176.
- (13) Tolkien, *The Lord of the Rings*, vol. 1, p. 40.
- (14) 川崎寿彦, 『楽園と庭』, (東京:中央公論社,1984), p. 11. 参照。
- (15) M-L. von Franz, *Shadow and Evil in Fairytales*, (Irving: Spring Publication, 1974), p. 146.
- (16) Tolkien, *The Lord of the Rings*, vol. 2, p. 209.
- (17) Ibid., p. 210.
- (18) Tolkien, *The Lord of the Rings*, vol. 1, p. 332.
- (19) Ibid., p. 331.
- (20) Tolkien, *The Lord of the Rings*, vol. 3, p. 220.
- (21) M. M. Bakhtin, “Epic and Novel”, *The Dialogic Imagination*, ed. by Holquist Michael, (Austin: University of Texas Press, 1981), p. 19.
- (22) Ibid., p. 13.